

社会貢献活動

独自のノウハウや経営資源を活かして、
広く社会に対する責任を果たしていきます。

社会貢献活動の考え方

カシオは創業以来、「創造 貢献」の経営理念に基づき、人々から喜びと感動をもって受け入れられる製品およびサービスを提供することを社会貢献の原点としてきました。

カシオの社会貢献の重点分野としては、地球そしてすべての生命を守るための「環境保全」、将来の世界を担う「次世代教育」、心の成長を促す「文化・芸術」、社会の持続的成長に寄与する「学術・研究」、さらに社会の一員としての「地域社会活動」の5分野を設定しています。

「カシオ創造憲章 行動指針」には「ギブ・アンド・テイク」という考えがあります。これは『まず自分自身が相手に何を与えることができるか』、『どのような貢献ができるか』を考えようということです。

社会貢献についてもあらゆるステークホルダーとのコミュニケーションを通じて、企業市民としてカシオに何ができるかを見極めながら、自主的な社会貢献活動を設定し、責任を果たしていくことが重要であると認識しています。

カシオ科学振興財団の活動

カシオ科学振興財団は1982年に、故・榎尾茂前会長と榎尾四兄弟によって設立されました。若手研究者による萌芽的な段階にある先駆的かつ独創的研究を助成することを主眼に、毎年40件程度の研究助成を行うと共に、海外派遣、研究会助成も年間各10件程度行っています。

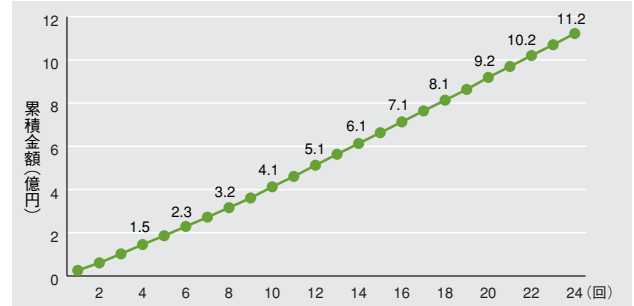
2006年度は、46件の研究に対し、合計5,199万円の助成を行いました。助成を受けられたのは、高知大学・佐藤隆幸教授、山口大学・山本晴彦教授、群馬大学・三浦健太助手などです。2006年12月1日に第24回になる贈呈式を挙行政し、助成金をお贈りしました。

第1回から第24回までの助成総件数は、880件、助成金の総額は、11億2,200万円となります。



「カシオ科学振興財団」Webサイト
<http://www.casio.co.jp/company/zaidan>

カシオ科学振興財団 研究助成金(累積)の推移



◆ 財団活動の新しいところみについて ◆

助成財団をとりまく環境は大きく変わりつつあります。このような状況の中で、少しでも財団の活動を世の中にわかりやすい形で発信していこうということで、2006年度より、新しいところみとして以下の2点を具体化しました。



カシオ科学振興財団
事務局長
田原 伊和男

1. 特別テーマによる助成枠の新設

財団の助成対象分野は過去23年の活動の中で拡大してきており、現在21分野に亘っております。しかし、これらの分野は財団の活動の基本でもあるため、あまり簡単に変更できません。

他方、基礎研究の分野でも、大きく環境が変化することがあります。例えば、2004年の4月から実施された国立大学の法人化はその一例です。このような状況の変化に柔軟に対応し、助成応募研究者のニーズに応えることも財団の重要な役割です。

そのような背景から、年度ごとに、または、3~5年の中期で新しい助成対象分野を比較的簡単に設定できるような仕組みを導入しました。

2. 助成研究者による研究成果発表会の開催

従来、財団と助成研究者との関係は、助成金受領1年後に研究報告書を提出していただいた時点で実質的に途切れていました。これを改善するために、助成研究者の皆さんの研究成果を事務局で追跡し、時宜にかなったテーマで講演をお願いするような場を設けることにしたのです。一般の参加者を広く受け入れ、財団の助成がどのような成果を生みつつあるのかを理解していただく一助になるのではないかと思います。

「第6回イルカ・クジラ・エコリサーチネットワーク」プロジェクト支援

G-SHOCK/Baby-Gは1994年に日本で開催された「国際イルカ・クジラ会議」以来、アイサーチ・ジャパンと共に日本と世界のイルカ・クジラに関する教育・研究活動をサポートしています。2006年は、「第6回イルカ・クジラ・エコリサーチネットワーク」において、「イルカ・クジラ・ウォッチングキャラバン2006」と、日本におけるよりよいイルカ・クジラ・ウォッチングの実現に向けた取り組みをサポートしました。

イルカ・クジラと人間、そして、すべての自然と命が、この地球上でひとつにつながり、調和して生きていることを表す「ALL AS ONE」のメッセージをプリントした特別モデルを発売。このモデルには、廃棄電池を極力減らすことのできるタフソーラーを採用し、パッケージにはカシオの企業活動で利用済みの紙を含んだ再生紙を使用しています。また、アイサーチ・ジャパンの活動の趣旨を盛り込んだ小冊子を同梱し、認知、理解の促進を図っています。そして、このモデルの売り上げの一部をアイサーチ・ジャパンに寄付しました。



G-SHOCK
「イルカ・クジラ・エコリサーチ
ネットワーク」モデル

アイサーチ・ジャパンは「イルカ・クジラを知る・会いに行くことを通して、自然環境を大切にできる人へ」をテーマに環境教育活動に取り組んでいます。

カシオ計算機株式会社様には10年以上に亘りご支援いただき、ありがとうございます。

記念モデルも再生素材のパッケージやタフソーラーなど、年々環境負荷の少ないものに進化してきました。多くの若者の関心を集めるG-SHOCKと、それを生み出す企業の環境への取り組みは、大きな影響力を持っています。いつまでも環境を大切にす企業であってほしいと思います。



アイサーチ・ジャパン
(国際イルカ・クジラ教育リサーチセンター)代表
大下 英和氏

カシオ教育サイトの運営

カシオは1998年より「CASIO WEW (Worldwide Education Website)」を立上げています。サイト立上げ以来、多くの数学教育関係者の方が訪れ、15,000名を超えるユーザーにご利用頂いています。

この教育サイトは、カシオの関数電卓をより多く知ってもらい、教育現場において効果的に活用してもらうことを目的としており、カシオ関数電卓の製品情報やソフトウェアのダウンロードサービスの他、数学の授業でカシオ関数電卓を効果的に活用するために海外の様々な国で作成された授業事例(教本)を数多く紹介・提供しています。

2007年2月には、内容をリニューアルし、教育関係者向けのフォーラムを設置しました。このフォーラムでは、教育関係者の方が作った授業事例や製品に関するご意見などを自由に議論・意見交換する場を提供しています。

これにより、幅広い教育関係者の方々と授業事例のノウハウを共有でき、カシオの製品開発にも幅広い意見のフィードバックが可能となります。



「CASIO WEW」Webサイト



「CASIO WEW」(英文)
Webサイト
<http://edu.casio.com/>

カシオ上海貿易 上海の3大学に「カシオ教育奨励基金会」を設立

カシオ上海貿易は2005年に北京大学において「北京大学日本学研究カシオ基金会」を設立したの続き、2006年11月27・28日に上海の復旦大学、上海外国語大学、華東政法学院に「カシオ教育奨励基金会」を設立しました。

復旦大学は国务院直轄の国家重点総合大学として、上海外国語大学は外国語教育における権威として、華東政法学院は法律分野における専門大学として、中国内外に要人を輩出していると共に、優れた研究を行っています。

各大学には今後10年間に亘り教育奨励金を拠出すると共に、人材交流や情報交換などを含めた積極的かつ継続的な協力を推進し、学術の発展に貢献していきます。



授与式